

## 19. 対称性低下法による電子状態の term決定法

## §0 疑問の発生

原子軌道や分子軌道に電子を配置した結果生じる電子状態を表す term(項)を決める手順は、多くの分子分光光学や量子化学のテキストに記されている。たとえば、原子の異なる p 軌道に2個の電子を配置した場合(配置  $p^2$  ではなく配置 pp), 軌道に関しては,  $l_1=1, l_2=1$  より  $L=0,1,2$  となるから S, P, D 状態が生じ, スピンに関しては,  $s_1=1/2, s_2=1/2$  より  $S=0,1$  となるから1重項と3重項が生じる<sup>1</sup>。これらの軌道とスピンを組み合わせて得られる<sup>1</sup>S, <sup>3</sup>S, <sup>1</sup>P, <sup>3</sup>P, <sup>1</sup>D, <sup>3</sup>Dが全 term である。しかし, 2個の電子を同じ p 軌道に配置すると(配置  $p^2$ ), Pauli 原理により<sup>3</sup>S, <sup>1</sup>P, <sup>3</sup>Dが禁止されるため<sup>1</sup>S, <sup>3</sup>P, <sup>1</sup>Dしか生じない。この理由は, p 軌道を構成する3つの成分( $m_l = -1, 0, 1$ )に $\alpha$ スピン( $m_s = 1/2$ )と $\beta$ スピン( $m_s = -1/2$ )<sup>2</sup>を書き込んでみれば容易に理解できる<sup>3</sup>。分子の場合には<sup>4</sup>, 異なる $\pi$ 軌道に配置した2個の電子(配置  $\pi^2$  ではなく配置  $\pi\pi$ )を考えると,  $\lambda_1=1, \lambda_2=1$  であることより  $\lambda_1+\lambda_2=2, -\lambda_1-\lambda_2=-2, -\lambda_1+\lambda_2=0, \lambda_1-\lambda_2=0$  の4状態が生じ<sup>5</sup>, 2と-2の組から  $\Lambda=2$  つまり $\Delta$ 状態ができ, 2つの0から  $\Sigma^+$  状態と  $\Sigma^-$  状態ができる。これは, 群論での既約表現の直積  $\pi \otimes \pi$  の結果  $\Sigma^+, \Sigma^-, \Delta$  が得られることに対応している<sup>6</sup>。2個の電子スピン  $s_1=1/2, s_2=1/2$  を合成して得られる  $S=0,1$  (スピン多重度  $2S+1$  は, それぞれ1と3)と組み合わせて, 全体で<sup>1</sup> $\Sigma^+, ^3\Sigma^+, ^1\Sigma^-, ^3\Sigma^-, ^1\Delta, ^3\Delta$  という6個の term が得られることは原子の場合と同様であり容易に理解できる。ところが, 同じ $\pi$ 軌道にある2個の電子(配置  $\pi^2$ )の場合に, Pauli 原理によって<sup>3</sup> $\Sigma^+, ^1\Sigma^-, ^3\Delta$  が禁じられ, 結果として<sup>1</sup> $\Sigma^+, ^3\Sigma^-, ^1\Delta$  の3つの term が生じる理由を理解するのは(意外に)難しい。原子の場合と同様に,  $\pi$ 軌道を構成する2つの成分( $\lambda$ と $-\lambda$ )に個々の電子の分子軸方向のスピン角運動量( $\sigma = -1/2, 1/2$ )<sup>7</sup>を書き込むと, <sup>1</sup> $\Sigma, ^3\Sigma, ^1\Delta$  という3つの term が生じることはわかるが, <sup>1</sup> $\Sigma$  状態と<sup>3</sup> $\Sigma$  状態の鏡映対称性( $\Sigma^+, \Sigma^-$  のいずれなのか)を決めることができない状態に陥る。言い換えると, 分子軸方向のスピン角運動量 $\sigma$ と分子軸を含む面での鏡映操作の関連が不明であるのにもかかわらず, なぜ電子状態の鏡映対称性がスピン多重度に連動して決ま

<sup>1</sup>  $l_i$  は電子  $i$  の軌道角運動量量子数,  $L$  は電子の全軌道角運動量量子数,  $s_i$  は電子  $i$  のスピン角運動量量子数,  $S$  は電子の全スピン角運動量量子数である。

<sup>2</sup>  $m_l$  は電子の軌道角運動量の1つの軸( $z$  軸)方向への射影成分を表す量子数,  $m_s$  は電子のスピン角運動量の  $z$  軸方向への射影成分を表す量子数である。

<sup>3</sup> 図や表を用いる具体的な方法が, 文献1, p.138および文献2, pp.180~182に示されている

<sup>4</sup> ここでは直線分子(あるいは2原子分子)を考える。

<sup>5</sup>  $\lambda_i$  は電子  $i$  の軌道角運動量( $l_i$ )の分子軸方向への射影成分を表す量子数である。直線分子の場合には, 量子数  $\lambda_i$  で決まる角運動量は分子軸方向(1次元)にしか向かないから, 角運動量  $\lambda_1$  と  $\lambda_2$  のベクトル和は代数和で考えればよい(原子の場合のベクトル和とは異なる)。したがって,  $\Lambda = |\Sigma_i(\pm\lambda_i)|$  となる。

<sup>6</sup> 角運動量の合成(coupling)は, 群論の既約表現の掛け算(直積)に対応させて考えることができる。なお, 本書では直積の掛け算記号に  $\otimes$  を用いる。

<sup>7</sup> 分子の場合は  $m_s$  の代わりに  $\sigma$  と書き,  $M_S$  の代わりに  $\Sigma$  と書く( $\sigma$ と $\Sigma$ はいずれもイタリック体)。なお, 分子分光光学の慣習では, 軌道角運動量  $l=0$  に対応する原子軌道の名称  $\sigma$  および電子の全軌道角運動量の分子軸方向の大きさ  $\Lambda=0$  に対応する電子状態の名称  $\Sigma$  は upright 体で記す。

るのか、という疑問が生じるのである。

上記の内容に関する“最高峰”の解説書といえる、G. Herzberg, *Molecular Spectra and Molecular Structure I, Spectra of Diatomic Molecules*, Van Nostrand Reinhold, New York, 1950 (文献3)を参照すると、同書 p. 336 の Table 31 に、同じ分子軌道に複数の電子が配置された場合( $\sigma^2$ ,  $\pi^2$ ,  $\pi^3$ ,  $\pi^4$ ,  $\delta^2$ ,  $\delta^3$ ,  $\delta^4$ )に生じる term がリストアップされている。Herzberg は配置  $\pi^2$  の場合を例に挙げて、電子が Fermi 粒子(=全波動関数が電子交換<sup>1</sup>に対して反対称)であるから、電子交換に対して反対称の1重項スピン関数( $S=0$ )には電子交換に対して対称である軌道関数  $\Sigma^+$  を組み合わせ、電子交換に対して対称の3重項スピン関数( $S=1$ )には電子交換に対して反対称である軌道関数  $\Sigma^-$  を組み合わせる必要があり<sup>2</sup>、結果として<sup>1</sup> $\Sigma^+$  と <sup>3</sup> $\Sigma^-$  が生じると述べている(文献3, pp.335~336)。この解説で(一瞬)理解できた気にはなるものの、なぜ、分子全体の電子軌道関数の鏡映操作に対する対称性が電子交換に対する対称性と等価であるのかわかりにくく、釈然としないまま文献3の Table 31 を使い続けることになってしまう(そうなのは、筆者だけかもしれない)。

本書は、上記の疑問を(群論を利用して)解決し、同じ軌道に複数の電子が配置された場合の term 決定法を理解するために書かれた monograph である。

## §1 対称性低下法

本書では、上記の疑問の解決に「対称性低下法」(method of descending symmetry)を利用する。対称性低下法は、もともと、結晶場(あるいは配位子場)によって分裂した d 軌道に電子が配置することにより生じる電子状態の term を決めるための方法であるが<sup>3</sup>、たとえば、正八面体環境( $O_h$  点群)に置かれた d 軌道が  $t_{2g}$  軌道と  $e_g$  軌道に分裂し、これらの軌道に電子が入った  $(t_{2g})^2$  や  $(e_g)^2$  という電子配置からどのような term が生じるかという問題は、§0 で述べた、電子配置  $\pi^2$  により生じる電子状態を決定する議論とまったく同じ問題に帰結するのである。以下では、まず、対称性低下法の復習から始める。

### 1.1 例1：電子配置 $(t_{2g})^2$

$O_h$  点群(正八面体)の電子配置  $(t_{2g})^2$  により生じる電子状態は、次式のように、既約表現  $t_{2g}$  同士の直積を簡約<sup>4</sup>することにより得られる<sup>5</sup>。

<sup>1</sup> Fermi 粒子は1対の粒子交換に対して反対称であるから、正確に表現すると、奇数回の交換に関して反対称、となる。

<sup>2</sup> 群論によれば、縮重既約表現自身の直積の結果、対称積と反対称積が生じる。たとえば、既約表現  $\Pi$  の直積  $\Pi \otimes \Pi$  の結果は  $\Sigma^+ + \Sigma^- + \Delta$  となるが、これらのうち  $\Sigma^+$  と  $\Delta$  が対称積であり、 $\Sigma^-$  が反対称積である。文献5, Appendix III, Table 57 に掲載されている既約表現掛算表では、 $\Sigma^+ + [\Sigma^-] + \Delta$  のように、直積の結果生じる反対称積の既約表現に  $[ ]$  が付けられている。なお、本書では代数の掛け算と既約表現の直積を区別するために後者には記号  $\otimes$  を用いる。

<sup>3</sup> 対称性低下法は H. Bethe, *Ann. Physik*, **3**, 133 (1929) の「結晶における項の分裂」という題目の論文において示された。同論文は、今日の結晶場理論、配位子場理論、遷移金属錯体の分子軌道理論の起源といえる記念碑的な論文である。対称性低下法の解説については、文献6, 第11章や文献7, 第9章を参照。

<sup>4</sup> 正攻法としては、既約表現を見ながら指標の掛け算を行って可約表現を得てから、簡約の公式により各既約表現の個数を見出すという手順になるが、毎回その計算を行うのは手間なので、結果をまとめた文献5, Appendix III, Table III を見ればよい。

<sup>5</sup> この直積の結果に関して、対称積、反対称積の分類は不要である(理由は後述の§3の Q1 & A1 を参照)。なお、既

$$(t_{2g})^2 = A_{1g} + E_g + T_{1g} + T_{2g} \quad (1)$$

しかし、この計算だけではそれぞれの電子状態のスピン多重度を決定することができないので対称性低下法を適用する<sup>1</sup>。対称性の低下先の点群は、無縮重既約表現だけをもつ点群である方が手間が少なくすむので<sup>2</sup>、ここでは $C_{2v}$ 点群に低下させる<sup>3</sup>。本書巻末の既約表現相関表(付表1)より、対称性の低下( $O_h \rightarrow C_{2v}$ )によって、式(1)の各電子状態はそれぞれ

$$A_{1g} \rightarrow A_1 \quad (2)-1$$

$$E_g \rightarrow A_1 + A_2 \quad (2)-2$$

$$T_{1g} \rightarrow A_2 + B_1 + B_2 \quad (2)-3$$

$$T_{2g} \rightarrow A_1 + B_1 + B_2 \quad (2)-4$$

と変化することがわかる。対称性の低下は空間座標の変化であるから、スピン関数は対称性の低下の影響を受けない。つまり、スピン多重度は対称性を低下しても保存される。したがって、式(2)の各式の両辺のスピン多重度は同じである<sup>4</sup>(が、現時点ではスピン多重度が不明である)。

一方、 $O_h$ 点群の $t_{2g}$ 軌道は、 $C_{2v}$ 点群への対称性の低下によって(再び付表1を参照),

$$t_{2g} \rightarrow a_1 + b_1 + b_2 \quad (3)$$

と変化する(電子状態と軌道という違いはあるが、既約表現の変化という点では、式(2)-4と同じである)。対称性を低下してで

表1.  $a_1, b_1, b_2$  軌道への電子2個の配置

$a_1$	$b_1$	$b_2$	$M_S$	電子状態
$\uparrow\downarrow$			0	$(a_1)^2 = {}^1A_1$
	$\uparrow\downarrow$		0	$(b_1)^2 = {}^1A_1$
		$\uparrow\downarrow$	0	$(b_2)^2 = {}^1A_1$
$\uparrow$	$\uparrow$		1	$(a_1)^1(b_1)^1 = {}^1B_1, {}^3B_1$
$\downarrow$	$\downarrow$		-1	
$\uparrow$	$\downarrow$		0	
$\downarrow$	$\uparrow$		0	
$\uparrow$		$\uparrow$	1	$(a_1)^1(b_2)^1 = {}^1B_2, {}^3B_2$
$\downarrow$		$\downarrow$	-1	
$\uparrow$		$\downarrow$	0	
$\downarrow$		$\uparrow$	0	
	$\uparrow$	$\uparrow$	1	$(b_1)^1(b_2)^1 = {}^1A_2, {}^3A_2$
	$\downarrow$	$\downarrow$	-1	
	$\uparrow$	$\downarrow$	0	
	$\downarrow$	$\uparrow$	0	

約表現は大文字で書くので、既約表現としては $T_{2g}$ と書くべきであるが、軌道を表す場合は(分子分光学の慣習により)小文字で書くので $t_{2g}$ と記した。なお、 $O_h$ 点群の既約表現 $T_1, T_2$ を $F_1, F_2$ と書く成書も多い。

<sup>1</sup> 結晶場理論(配位子場理論)における対称性低下法は、ある電子配置で生じる各電子状態のスピン多重度を決定するための方法ということもできる。

<sup>2</sup> 低下先の点群は、無縮重既約表現だけから構成される点群であればなんでもよいというわけではない。ここで扱っている $O_h$ 点群の $(t_{2g})^2$ の場合、 $C_{2v}$ 点群あるいは $C_{2h}$ 点群を用いて term を一義的に決めることができるが、 $D_{2h}(D_2)$ 点群を用いると決めることができない。また、点群の対称性が低すぎるとよくないということもなく、 $C_s$ 点群を使っても決定することができる。低下させた点群で term を一義的に決定できないときは、別の点群(多くの場合、少し対称性が高い点群)を使ってやり直せばよい(筆者オススの低下先点群は $C_{2v}$ 点群)。また、点群自体が縮重既約表現をもっている、対称性を低下させたときに、対象にしている既約表現が無縮重既約表現に分解されさえすればよい。たとえば、 $O_h$ 点群の $(e_g)^2$ の場合は、(既約表現 $T_1, T_2$ を扱う必要がないので)対称性低下先の点群として $D_{4h}$ 点群を利用しても term を一義的に決定することができる。

<sup>3</sup>  $O_h$ 点群と他の点群の既約表現相関表が、文献7の p. 370, 付録 III-B に掲載されている。さらに詳細な相関表は文献8, Appendix X-8 の Table X-14を参照。

<sup>4</sup> この、対称性の高低によらずスピン多重度が保存されることが、対称性低下法による term 決定を可能にしているということもできる。

きた3つの軌道( $a_1, b_1, b_2$ )に2個の電子を配置する方法とその結果生じる電子状態を表1に示す。表1と式(2)を比較することにより、式(2)の各電子状態のスピン多重度を決定することができる。

表1には、3重項電子状態として3個の電子状態 $^3A_2, ^3B_1, ^3B_2$ がある。一方、式(2)のうち、 $A_2, B_1, B_2$ が組になっているのは、式(2)-3の $T_{1g}$ であり、式(2)-3の両辺のスピン多重度が同じであることより $T_{1g}$ は3重項、つまり $^3T_{1g}$ であるとわかる。次に、式(2)-4は $A_1, B_1, B_2$ が組になっており、表1にある1重項の組 $^1A_1, ^1B_1, ^1B_2$ に対応させることができるから、式(2)-4の $T_{2g}$ は1重項 $^1T_{2g}$ であることがわかる。 $^3T_{1g}$ と $^1T_{2g}$ に対応させた電子状態以外で表1に残っている電子状態は、 $^1A_1, ^1A_1, ^1A_2$ であり、これらは、式(2)-1の $A_{1g}$ および式(2)-2の $E_g$ に対応させることができるから、これら2つはいずれも1重項であり、 $^1A_1$ と $^1E_g$ であることがわかる。以上より、 $(t_{2g})^2$ 配置から生じる式(1)の右辺の電子状態のスピン多重度がすべて確定し、

$$(t_{2g})^2 = ^1A_{1g} + ^1E_g + ^3T_{1g} + ^1T_{2g} \quad (4)$$

となる。

## 1.2 例2：電子配置 $(t_{2g})^5(e_g)^2$

§0で示した疑問の元になった電子配置 $\pi^2$ を早く扱いたいが、もう1つだけ、具体例として電子配置 $(t_{2g})^5(e_g)^2$ を考えておこう。まず $(t_{2g})^5$ については、空孔則<sup>1</sup>を適用すれば、5個の既約表現 $t_{2g}$ の直積をとる必要はなく、

$$(t_{2g})^5 = (t_{2g})^1 = ^2T_{2g} \quad (5)$$

より、生じる電子状態は $^2T_{2g}$ のみとわかる<sup>2</sup>。一方、 $(e_g)^2$ については1.1と同様の手順で $O_h$ 点群の既約表現 $e_g$ 同士の直積を簡約すれば、配置 $(e_g)^2$ から生じる電子状態として

$$(e_g)^2 = A_{1g} + A_{2g} + E_g \quad (6)$$

が得られる。ここでも対称性を $C_{2v}$ 点群に低下させると(付表1を参照)、式(6)の電子状態はそれぞれ

$$A_{1g} \rightarrow A_1 \quad (7-1)$$

$$A_{2g} \rightarrow A_2 \quad (7-2)$$

$$E_g \rightarrow A_1 + A_2 \quad (7-3)$$

と変化する。また、 $O_h$ 点群の $e_g$ 軌道は、 $C_{2v}$ 点群への対称性の低下によって、

$$e_g \rightarrow a_1 + a_2 \quad (8)$$

と変化する(既約表現の変化という点では、式(7)-3と同じ)。対称性を低下してできた2つの軌

<sup>1</sup> 空孔則とは、p軌道の場合、電子配置 $p^n$ と電子配置 $p^{(6-n)}$ が同じtermを与えること、また、d軌道の場合、電子配置 $d^n$ と電子配置 $d^{(10-n)}$ が同じtermを与えることを意味する。

<sup>2</sup> スピン1個を考えればよいから、2重項であることも容易にわかる。

道( $a_1, a_2$ )に2個の電子を配置する方法と生じる電子状態を書き上げると表2のようになる。

式(7)-3は $A_1$ と $A_2$ が組になっているが、表2で $A_1$ と $A_2$ が同じスピン多重度をもつ状態は $^1A_1$ と $^1A_2$ の組しかない。したがって、式(7)-3の $E_g$ は1重項状態であり $^1E_g$ となる。表2に残っている $^1A_1$ と $^3A_2$ は、それぞれ式(7)-1の $A_{1g}$ と式(7)-2の $A_{2g}$ に対応させることができるから、それぞれのスピン多重度まで記すと、 $^1A_{1g}$ 、 $^3A_{2g}$ となる。以上より、配置 $(e_g)^2$ により生じうる電子状態がすべて確定し、

表2.  $a_1, a_2$  軌道への電子2個の配置

$a_1$	$a_2$	$M_S$	電子状態
$\uparrow\downarrow$		0	$(a_1)^2 = ^1A_1$
	$\uparrow\downarrow$	0	$(a_2)^2 = ^1A_1$
$\uparrow$	$\uparrow$	1	$(a_1)^1(a_2)^1 = ^1A_2, ^3A_2$
$\downarrow$	$\downarrow$	-1	
$\uparrow$	$\downarrow$	0	
$\downarrow$	$\uparrow$	0	

$$(e_g)^2 = ^1A_{1g} + ^3A_{2g} + ^1E_g \quad (9)$$

を得る。

$(t_{2g})^5$ については、式(5)ですでに $^2T_{2g}$ であることがわかっているから、 $^2T_{2g}$ と式(9)の3つの電子状態の組み合わせにより生じる $(t_{2g})^5(e_g)^2$ 全体の電子状態を決定する必要がある。そのためには、 $O_h$ 点群の既約表現の直積計算およびスピン角運動量の合成を行って、全体としての既約表現とスピン多重度を決定すればよい。その過程と結果を示したものが表3である。最終結果をまとめると、

$$(t_{2g})^5(e_g)^2 = ^2T_{1g} + ^2T_{1g} + ^4T_{1g} + ^2T_{2g} + ^2T_{2g} \quad (10)$$

となる。

表3. 電子配置 $(t_{2g})^5(e_g)^2$ から生じる電子状態

$(t_{2g})^5$	$(e_g)^2$	$S$	直積	電子状態
$^2T_{2g}$	$^1A_{1g}$	1/2	$T_{2g} \times A_{1g} = T_{2g}$	$^2T_{2g}$
	$^3A_{2g}$	3/2, 1/2	$T_{2g} \times A_{2g} = T_{1g}$	$^4T_{1g}, ^2T_{1g}$
	$^1E_g$	1/2	$T_{2g} \times E_g = T_{1g} + T_{2g}$	$^2T_{1g}, ^2T_{2g}$

## §2 電子配置 $\pi^2$ および $\delta^2$

いよいよ、疑問の発生のもとになった電子配置 $\pi^2$ から生じる term を決めることにしよう。直積 $\pi \otimes \pi$ の結果は、

$$\pi^2 = \Sigma^+ + \Sigma^- + \Delta \quad (11)$$

であるが、これまでの議論同様、この段階ではスピン多重度は未知である。点群を $C_{\infty v}$ から

$C_{2v}$  に低下させると<sup>1</sup>, 既約表現相関表(付表2)にしたがって, それぞれの電子状態は

$$\Sigma^+ \rightarrow A_1 \quad (12)-1$$

$$\Sigma^- \rightarrow A_2 \quad (12)-2$$

$$\Delta \rightarrow A_1 + A_2 \quad (12)-3$$

と変化する(ここでは  $z \rightarrow z$  の軸対応を利用した<sup>2</sup>)。一方,  $\pi$ 軌道は, 点群が  $C_{\infty v}$  から  $C_{2v}$  に低下するとき,

$$\pi \rightarrow b_1 + b_2 \quad (13)$$

と変化するから(ここでも  $z \rightarrow z$  の軸対応を利用した),  $\pi$ 軌道からできた2つの軌道( $b_1, b_2$ )に2個の電子を配置することを考えると, 表4に示したように,  $^1A_1, ^1A_1, ^1A_2, ^3A_2$  の4つの電子状態が生じる。これらを式(12)の右辺に現れた4つの電子状態と比較すると, 式(12)-3の  $A_1 + A_2$  は,  $^1A_1 + ^1A_2$  に対応するから  $\Delta$ 状態は1重項であることがわかる。式(12)-2の単独の  $A_2$  に対応するものは  $^3A_2$  のみであるから,  $\Sigma^-$  状態は3重項である。最後に, 式(12)-1の  $A_1$  は1重項であるから, 全体として,

表4.  $b_1, b_2$  軌道への電子2個の配置

$b_1$	$b_2$	$M_S$	電子状態
$\uparrow\downarrow$		0	$(b_1)^2 = ^1A_1$
	$\uparrow\downarrow$	0	$(b_2)^2 = ^1A_1$
$\uparrow$	$\uparrow$	1	$(b_1)^1(b_2)^1 = ^1A_2, ^3A_2$
$\downarrow$	$\downarrow$	-1	
$\uparrow$	$\downarrow$	0	
$\downarrow$	$\uparrow$	0	

$$\pi^2 = ^1\Sigma^+ + ^3\Sigma^- + ^1\Delta \quad (14)$$

となり, §0で述べた文献3の Table 31と同じものが得られている。

次に, 電子配置  $\delta^2$  を考えよう(方法と手順は  $\pi^2$  の場合とまったく同じである)。直積  $\delta \otimes \delta$  の結果は,

$$\delta^2 = \Sigma^+ + \Sigma^- + \Gamma \quad (15)$$

である。既約表現相関表(付表2)からわかるように, 点群を  $C_{\infty v}$  から  $C_{2v}$  に低下させると, それぞれの電子状態は

$$\Sigma^+ \rightarrow A_1 \quad (16)-1$$

$$\Sigma^- \rightarrow A_2 \quad (16)-2$$

$$\Gamma \rightarrow A_1 + A_2 \quad (16)-3$$

と変化する(軸対応は  $z \rightarrow z$  を利用した)。したがって, 対称性低下時の電子状態は  $\pi^2$  の場合(式

<sup>1</sup> 低下先の点群は, 必ずしも  $C_{2v}$  である必要はないが( $D_{2h}$  でもよい),  $C_{2h}$  や  $C_s$  点群を使うと, 軸対応によっては term が一義的に決まらなくなるので注意が必要である。一義的に決まらないことがわかった時点で, 別の点群でやり直してみればよい。

<sup>2</sup> 使用する軸の対応について§3で詳しく述べる。

(12))とまったく同じである。 $\delta$ 軌道は、点群が $C_{\infty v}$ から $C_{2v}$ に低下するとき、

$$\delta \rightarrow a_1 + a_2 \quad (17)$$

と変化する(付表2)。 $a_1, a_2$ 軌道に2個の電子を入れて生じる電子状態は、すでに表2で得ており、 $^1A_1, ^1A_1, ^1A_2, ^3A_2$ となることがわかっているから、これらと式(16)を組み合わせ

$$\delta^2 = ^1\Sigma^+ + ^3\Sigma^- + ^1\Gamma \quad (18)$$

を得る。 $\Sigma$ 電子状態に関する結果が $\pi^2$ の場合とまったく同じになるのは、 $C_{2v}$ に低下させて生じる電子状態(式(12)と(16))がまったく同じであること、および $C_{2v}$ に低下した軌道の既約表現同士の直積が同じ(式(13)： $b_1 \otimes b_2 = a_2$ 、式(17)： $a_1 \otimes a_2 = a_2$ )だからである。

### §3 Q & A

以下では、これまでに述べた内容について生じうる疑問を示し、Q & A形式で解説を記す。

Q1. 縮重既約表現自身の直積は対称積と反対称積に分類され、反対称積は消えて対称積だけが残るのではないか。たとえば、直線3原子分子の変角振動(既約表現： $\pi$ )の準位 $\nu = 2$ を構成する状態は、 $\pi^2 = \Sigma^+ + \Delta$ より2つある。これは、 $\pi^2 = \Sigma^+ + \Sigma^- + \Delta$ のうち、対称積である $\Sigma^+$ と $\Delta$ が残り、反対称積 $\Sigma^-$ が消えるからである<sup>1</sup>( $\Sigma^+$ と $\Delta$ は、それぞれ振動角運動量 $l = 0, 2$ に対応している)。ところが、§0に記されている Herzberg の方法では、反対称積 $\Sigma^-$ が消えないまま残り、特定のスピ関数(3重項)と組み合わせることで $^3\Sigma^-$ として生き残っている。§1や§2の説明においても、 $(e_g)^2 = A_{1g} + A_{2g} + E_g$ や $\pi^2 = \Sigma^+ + \Sigma^- + \Delta$ のように、反対称積は消えずそのまま書かれている。軌道関数の積の場合、なぜ反対称積が消えないのか。

A1. 反対称積が消えるのは次の理由にもとづいている。ある系の2重縮重固有関数2つ( $(\phi_a, \phi_b)$ と $(\varphi_a, \varphi_b)$ )の積<sup>2</sup>をとると

$$(\phi_a, \phi_b) \otimes (\varphi_a, \varphi_b) = (\phi_a \varphi_a, \phi_a \varphi_b, \phi_b \varphi_a, \phi_b \varphi_b) \quad (19)$$

により4つの関数が得られる。これらのうち $\phi_a \varphi_a$ と $\phi_b \varphi_b$ は系の固有関数となるが、 $\phi_a \varphi_b$ と $\phi_b \varphi_a$ は系の固有関数にならない。そこで、 $\phi_a \varphi_b$ と $\phi_b \varphi_a$ の線形結合を作り、

$$\phi_a \varphi_b + \phi_b \varphi_a \quad (20)$$

$$\phi_a \varphi_b - \phi_b \varphi_a \quad (21)$$

とするといずれもが固有関数になる(規格化定数は略)。このとき、 $\phi_a \varphi_a$ 、 $\phi_a \varphi_b + \phi_b \varphi_a$ 、 $\phi_b \varphi_b$ の3つが対称積、 $\phi_a \varphi_b - \phi_b \varphi_a$ が反対称積である。2つの縮重固有関数が同じ(つまり、 $(\varphi_a, \varphi_b)$ が $(\phi_a, \phi_b)$ 自身)である場合には、式(21)の関数(反対称積)は $\phi_a \varphi_b - \phi_b \varphi_a = \phi_a \varphi_b - \phi_a \varphi_b = 0$ となり消えてしまう。これが $\pi^2 = \Sigma^+ + \Sigma^- + \Delta$ から反対称積の $\Sigma^-$ が消えることに対応している。しかし、軌道に電子を配置した場合、電子に番号を付けて配置す

<sup>1</sup> 文献4, pp. 125~131に、縮重振動の振動励起準位( $\nu \geq 2$ )を構成している状態の決定法が解説されている。それぞれの状態は振動角運動量により区別される。

<sup>2</sup> 数学的にはクロネッカー積という。



るから、 $\phi_a\phi_b - \phi_b\phi_a$ をあらわに書くと

$$\phi_a(1)\phi_b(2) - \phi_b(1)\phi_a(2) \quad (22)$$

となり、(数学の  $xy - yx$  のように)同じ項の差という意味にならないからゼロにはならない。これが、軌道関数の反対称積が残る理由である。同様のことは、 $(\phi_a, \phi_b)$ をなじみ深いスピン関数 $(\alpha, \beta)$ に対応させるとわかりやすい。直積 $(\alpha, \beta) \otimes (\alpha, \beta)$ の結果である $\alpha\alpha$ ,  $\alpha\beta$ ,  $\beta\alpha$ ,  $\beta\beta$ のうち、 $\alpha\alpha$ と $\beta\beta$ は演算子 $S^2$ の固有関数<sup>1</sup>となっているが $\alpha\beta$ と $\beta\alpha$ は固有関数になっていない。そこで、 $\alpha\beta$ と $\beta\alpha$ の線形結合を作り、 $\alpha\beta + \beta\alpha$ と $\alpha\beta - \beta\alpha$ とするといずれも固有関数となる。この場合、 $\alpha\alpha$ ,  $\alpha\beta + \beta\alpha$ ,  $\beta\beta$ の3つが対称積で、 $\alpha\beta - \beta\alpha$ が反対称積であるが、 $\alpha\beta - \beta\alpha = \alpha\beta - \alpha\beta = 0$ となって消えるわけではない。それぞれのスピンには電子が割り当てられており、電子に付けた番号まで示すと $\alpha(1)\beta(2) - \beta(1)\alpha(2) = \alpha(1)\beta(2) - \alpha(2)\beta(1)$ であるからゼロにはならない。

- Q2. §0に示されている方法では、同じ軌道に複数の電子を配置する際、電子交換により固有関数全体の符号が逆転するという Pauli 原理を満足する関数を作るために、軌道関数とスピン関数の電子交換に対する対称性をチェックした上で両関数の組み合わせを考えるとという進め方になっているが、§2で示された方法では、軌道関数やスピン関数の対称性には言及しないまま一義的に正しい term が得られている。§2の方法は Pauli 原理を考慮していないように見えるが、なぜ問題が生じないのか。
- A2. §2に示した方法は、元の点群で Pauli 原理を直接考慮する代わりに、対称性を低下させた軌道に電子を配置するところで Pauli 原理を考慮している(例：表2, 表4)。対称性を低下させた点群で Pauli 原理を満足する term を作り、元の点群での term を決めているのであるから Pauli 原理は考慮されている。
- Q3. §2の方法において対称性を低下させる際、すべて「 $z \rightarrow z$ 」という軸対応が使われているが、他の軸対応を使うと問題が生じるのか。
- A3. 対称性を低下させる際に具体的な分子構造を想定しているわけではないから、 $z \rightarrow z$ ,  $z \rightarrow y$ ,  $z \rightarrow x$ の3種の軸対応のどれを用いても、同じ軸対応を一貫して使用する限り問題は生じない。(次項の Q4 & A4にも関連。)
- Q4. 上記 A3により、1つの軸対応を一貫して用いればよいとのことであるが、付表2によると、 $z \rightarrow y$ と $z \rightarrow x$ の軸対応では、( $z \rightarrow z$ とは違って)同じ $\Sigma^+$ であっても、 $\Sigma_g^+$ と $\Sigma_u^+$ はそれぞれ $C_{2v}$ の異なる既約表現 $A_1$ と $B_2$ (軸対応： $z \rightarrow y$ )および $A_1$ と $B_1$ (軸対応： $z \rightarrow x$ )に対応している。このため、対象にしている分子が $C_{\infty v}$ 点群で、その $\Sigma^+$ の対称性を低下させる場合、 $\Sigma_g^+$ と $\Sigma_u^+$ のいずれから低下させるべきか迷ってしまう。この、g, u 対称の選択

<sup>1</sup>  $S$  はスピン角運動量演算子である。

の問題は、 $\Sigma^+$ 以外のすべての既約表現 $\Sigma^-$ ,  $\Pi$ ,  $\Delta$ , ...についてもあてはまる共通の疑問である。

- A4. 結論から述べると、対称心をもたない分子の場合、 $g$  対称、 $u$  対称のいずれを用いてもよい。以下で、§2で扱った $C_{\infty v}$ 点群の $\pi^2$ の場合について具体的に確認してみる。電子配置 $\pi^2$ で生じる電子状態については、 $g \otimes g = u \otimes u = g$ であるから、 $\pi$ 軌道を $\pi_g$ 軌道とみなしても $\pi_u$ 軌道とみなしても、

$$(\pi_{g,u})^2 = \Sigma_g^+ + \Sigma_g^- + \Delta_g \quad (23)$$

となるから、対称性を低下させる電子状態はすべて  $g$  対称の既約表現 $\Sigma_g^+$ ,  $\Sigma_g^-$ ,  $\Delta_g$ である(この3つの電子状態の  $g$ ,  $u$  性を勝手に変更してはならないのは、元の軌道が $\delta$ 軌道や $\phi$ 軌道でも同様である)。一方、対称性低下による $\pi$ 軌道の変化を見る際には、質問で指摘されているように、 $\pi_g$ 軌道とみなすか $\pi_u$ 軌道とみなすかにより対称低下時の既約表現が異なってくる。 $\pi$ 軌道を $\pi_g$ 軌道とみなすと

$$\pi_g \rightarrow \begin{cases} a_2 + b_2 & (\text{軸対応: } z \rightarrow y) \\ a_2 + b_1 & (\text{軸対応: } z \rightarrow x) \end{cases} \quad (24)$$

$$(25)$$

となり、 $\pi_u$ 軌道とみなすと

$$\pi_u \rightarrow \begin{cases} a_1 + b_1 & (\text{軸対応: } z \rightarrow y) \\ a_1 + b_2 & (\text{軸対応: } z \rightarrow x) \end{cases} \quad (26)$$

$$(27)$$

となる( $z \rightarrow z$ の軸対応の場合は $\pi_g$ と $\pi_u$ が同じ結果になりおもしろくないので検討不要)。この結果を見ると、2個の電子について、同じ軸対応の式同士(24)と(26)および式(25)と(27)から生じる電子状態が異なるのではないかと心配になるかもしれない。しかし、 $z \rightarrow y$ 軸対応の式(24)にある2つの軌道( $a_2, b_2$ )に電子を2個配置して生じる電子状態と、式(26)の2つの軌道( $a_1, b_1$ )に電子を2個配置して生じる電子状態は、いずれも $^1A_1$ ,  $^1A_1$ ,  $^1B_1$ ,  $^3B_1$ となるから<sup>1</sup>、 $\pi$ 軌道を $\pi_g$ 軌道とみなしても $\pi_u$ 軌道とみなしても結果に相違は生じない。同様に、 $z \rightarrow x$ 軸対応の式(25)にある2つの軌道( $a_2, b_1$ )に電子を2個配置して生じる電子状態と、式(27)の2つの軌道( $a_1, b_2$ )に電子を2個配置して生じる電子状態は、いずれも $^1A_1$ ,  $^1A_1$ ,  $^1B_2$ ,  $^3B_2$ となるから、この軸対応の場合も $\pi$ 軌道を $\pi_g$ 軌道と $\pi_u$ 軌道のいずれで扱っても相違は生じない。式(23)で得ていた各電子状態の対称性低下による変化は、 $z \rightarrow y$ 軸対応では

$$\Sigma_g^+ \rightarrow A_1 \quad (28)-1$$

$$\Sigma_g^- \rightarrow B_1 \quad (28)-2$$

$$\Delta_g \rightarrow A_1 + B_1 \quad (28)-3$$

<sup>1</sup>  $a$  と  $b$  の積については  $a \otimes a = b \otimes b = a$  および  $a \otimes b = b$  であり、添字1と2の積については  $1 \otimes 1 = 2 \otimes 2 = 1$  および  $1 \otimes 2 = 2$  である。

となるから、式(24)または式(26)から得られる ${}^1A_1$ ,  ${}^1A_1$ ,  ${}^1B_1$ ,  ${}^3B_1$ との照合により、式(13)とまったく同じ結果

$$\pi^2 = {}^1\Sigma^+ + {}^3\Sigma^- + {}^1\Delta \quad (29)$$

が得られる。一方、 $z \rightarrow x$  軸対応では

$$\Sigma_g^+ \rightarrow A_1 \quad (30)-1$$

$$\Sigma_g^- \rightarrow B_2 \quad (30)-2$$

$$\Delta_g \rightarrow A_1 + B_2 \quad (30)-3$$

となり、式(25)または式(27)から得られる ${}^1A_1$ ,  ${}^1A_1$ ,  ${}^1B_2$ ,  ${}^3B_2$ との照合により、この軸対応の場合も式(13)とまったく同じ結果

$$\pi^2 = {}^1\Sigma^+ + {}^3\Sigma^- + {}^1\Delta \quad (31)$$

が得られる。したがって、元の軌道の  $g, u$  性に気遣うことなく ( $g$  対称か  $u$  対称かを自分で割り当ててから) 対称性を低下させればよいことがわかる。

Q5. 原子の term 決定(たとえば、電子配置  $p^2$ )に対称性低下法を適用することは可能か。可能な場合、なにかメリットはあるか。

A5. 当然ながら、原子の term 決定に適用することも可能である。ただ、原子の場合には、分子の  $\Sigma$  状態のように鏡映対称性を決める作業が不要であり、いきなり表1, 2, 4のように、対象にしている軌道の成分( $m_l$ )に可能な電子スピンの向きをすべて書き入れ(=Pauli 原理を考慮)、とりうる  $M_L$ ,  $M_S$  の値から生じる電子状態の term を見出せばよい<sup>1</sup>。その意味で、対称性低下法に格段の優位性はないが、対称性低下法に慣れると、対称性を低下させた軌道の既約表現を見るだけで電子状態を見出せるようになるので作業効率は上がる。たとえば、電子配置  $p^2$  の例を示すと、 $p$  軌道は  $u$  対称であるから、

$$(p_u)^2 = S_g + P_g + D_g \quad (32)$$

となり<sup>2</sup>、対称性を  $C_{2v}$  に低下させると、

$$S_g \rightarrow A_1 \quad (33)-1$$

$$P_g \rightarrow A_2 + B_1 + B_2 \quad (33)-2$$

<sup>1</sup> 実は、2電子配置( $p^2$  電子配置や  $d^2$  配置)の場合は、“ほぼ一瞬で” term を決定する方法が存在する。詳細については、拙書「球対称点群( $K_h$ )の直積と対称積・反対称積」漁火書店

[http://home.hiroshima-u.ac.jp/kyam/pages/results/monograph/Ref21\\_product.pdf](http://home.hiroshima-u.ac.jp/kyam/pages/results/monograph/Ref21_product.pdf)

を参照してください。

<sup>2</sup> すべての原子は  $K_h$  点群(連続回転反転群)に属している。文献5に  $K_h$  点群の既約表現掛算表は掲載されていないが、直積の結果(=可約表現)と指標表を目で照合するだけで容易に簡約することができる。なお、無限個の対称要素を有する点群における簡約に関しては文献9を参照。

$$D_g \rightarrow 2A_1 + A_2 + B_1 + B_2 \quad (33)-3$$

となる。一方、 $C_{2v}$  への対称性の低下により、 $p_u$  軌道は

$$P_u \rightarrow A_1 + B_1 + B_2 \quad (34)$$

と変化するから、電子を2個配置すると、電子状態 $^1A_1$ ,  $^1A_1$ ,  $^1A_1$ ,  $^1A_2$ ,  $^1B_1$ ,  $^1B_2$ ,  $^3A_2$ ,  $^3B_1$ ,  $^3B_2$ が生じる<sup>1</sup>。これらの電子状態と式(33)にある電子状態を照合して、 $S_g$ ,  $P_g$ ,  $D_g$ が、それぞれ $^1S_g$ ,  $^3P_g$ ,  $^1D_g$ であることがわかる。

Q6. 縮重既約表現を有する点群に対称性を低下するとどのような不都合が生じるのか。

A6. この疑問は、「対称性を低下すると、なぜスピン多重度が決まるのか」という基本事項にも関係する重要な疑問である。ここでは、試しに、 $O_h$  点群から  $D_{4h}$  点群に対称性を下げたときどのような不都合が生じるかをチェックしてみることにする。1.1で扱った  $(t_{2g})^2$  について  $D_{4h}$  点群に対称性を下げると、式(2)に対応する変化は、

$$A_{1g} \rightarrow A_{1g} \quad (35)-1$$

$$E_g \rightarrow A_{1g} + B_{1g} \quad (35)-2$$

$$T_{1g} \rightarrow A_{2g} + E_g \quad (35)-3$$

$$T_{2g} \rightarrow B_{2g} + E_g \quad (35)-4$$

となる(付表1参照)。一方、軌道  $t_{2g}$  は(式(35)-4と同様に)、

$$t_{2g} \rightarrow b_{2g} + e_g \quad (36)$$

と変化する。次に、 $D_{4h}$  点群での2つの軌道  $(b_{2g}, e_g)$  に2個の電子を配置したときの電子状態を決めなければならないので、表5のように配置を考えてみると、縮重軌道  $e_g$  に2個電子を配置してできる電子状態を容易に決められないという事態が生じる。それ以外の状態を使ってなんとか対応がとれないかと考えて、表5と式(35)を照合しても、 $^1A_{1g}$  が式(35)-1の  $A_{1g}$  と式(35)-2の  $A_{1g}$  のどちらに対応するか判断できず、また、 $^1E_g$  と  $^3E_g$  も式(35)-3と式(35)-4の  $E_g$  とどう対応

表5.  $b_{2g}$ ,  $e_g$  軌道への電子2個の配置

$b_{2g}$	$e_g$	$M_S$	電子状態
$\uparrow\downarrow$		0	$(b_{2g})^2 = ^1A_{1g}$
	$\uparrow\downarrow$	0	$(e_g)^2 = ?$
		$\uparrow\downarrow$	$(e_g)^2 = ?$
$\uparrow$	$\uparrow$	1	$(b_{2g})^1(e_g)^1 = ^1E_g, ^3E_g$
$\downarrow$	$\downarrow$	-1	
$\uparrow$	$\downarrow$	0	
$\downarrow$	$\uparrow$	0	
$\uparrow$		$\uparrow$	
$\downarrow$		$\downarrow$	
$\uparrow$		$\downarrow$	
$\downarrow$		$\uparrow$	
	$\uparrow$	$\uparrow$	$(e_g)^2 = ?$
	$\downarrow$	$\downarrow$	
	$\uparrow$	$\downarrow$	
	$\downarrow$	$\uparrow$	

<sup>1</sup> これらの電子状態は、電子の軌道への配置を示す図や表を作らなくても、既約表現を見るだけでわかる。

するのか判断できない。となると、やはり、 $(e_g)^2$  により生じる電子状態を明らかにしなければならない。このままでは先に進めないで、文献5の既約表現掛算表で、 $D_{4h}$  点群の既約表現  $e_g$  の直積  $e_g \times e_g$  を調べると、

$$(e_g)^2 = A_{1g} + [A_{2g}] + B_{1g} + B_{2g} \quad (37)$$

が得られる(縮重軌道に複数の電子を配置した問題を解く作業を進めているのに、その途中で、また、縮重軌道の既約表現の直積をとるのは気が進まないが、今の状況ではやむをえない)。式(37)は表5で「？」と書いた6個の配置に対応しており、式(37)のすべてが1重項であるとする、全体で4つの状態しかないことになってしまうのでつじつまが合わない。したがって、式(37)が6つの状態を表すためには、どれか1つが3重項でなければならないことになる。3重項スピンは対称関数であり、反対称軌道関数と組み合わせさせて Pauli 原理を満足する反対称化関数を作るから、3重項電子状態は反対称積の  $A_{2g}$  であると予想できる。これより、式(37)のスピン多重度が

$$(e_g)^2 = {}^1A_{1g} + {}^3A_{2g} + {}^1B_{1g} + {}^1B_{2g} \quad (38)$$

と決まる。以上で  $D_{4h}$  点群でのすべての電子状態の term が得られたので、式(35)と照合すると、式(4)とまったく同じ結果

$$(t_{2g})^2 = {}^1A_{1g} + {}^1E_g + {}^3T_{1g} + {}^1T_{2g} \quad (39)$$

が得られる。しかしながら、軌道関数の対称積、反対称積およびスピン関数の対称、反対称を議論することを避けるために対称性低下法を利用したにもかかわらず、対称性を  $D_{4h}$  点群に低下させると、再度、対称積、反対称積の議論を行う必要が生じ、議論が複雑になっている。このことから、対称性の低下先の点群が、無縮重既約表現だけをもつ点群の方が扱いがはるかに容易であることが理解できるであろう。

「対称性を低下すると、スピン多重度が決まる」という表現を少し変えて「縮重既約表現をもたない点群まで対称性を低下すると、スピン多重度が容易に決まる」とする方が、対称性低下法の原理をより正確に表している。スピンと軌道を独立に扱って、軌道の縮重が完全になくなる環境(点群)において電子を配置すれば、可能な配置ごとに生じるスピン多重度まで含めた電子状態を確定することができる。分子の形状(点群)を変えても、スピンと軌道が互いに独立であれば、対称性が低下した点群から元の点群に対称性を上げたときでもスピン(角運動量)は変わらず、同じスピン(角運動量)をもつ状態が“集まって”、対称性の高い点群での1つの電子状態を形成する、という描像が対称性低下法の中身である。

# 付録 既約表現相関表

付表1.  $O_h$  点群と  $D_{4h}$  点群および  $C_{2v}$  点群の相関表

$O_h$	$D_{4h}$	$C_{2v}$
$A_{1g}$	$A_{1g}$	$A_1$
$A_{2g}$	$B_{1g}$	$A_2$
$E_g$	$A_{1g} + B_{1g}$	$A_1 + A_2$
$T_{1g}$	$A_{2g} + E_g$	$A_2 + B_1 + B_2$
$T_{2g}$	$B_{2g} + E_g$	$A_1 + B_1 + B_2$
$A_{1u}$	$A_{1u}$	$A_2$
$A_{2u}$	$B_{1u}$	$A_1$
$E_u$	$A_{1u} + B_{1u}$	$A_1 + A_2$
$T_{1u}$	$A_{2u} + E_u$	$A_1 + B_1 + B_2$
$T_{2u}$	$B_{2u} + E_u$	$A_2 + B_1 + B_2$

付表2.  $D_{\infty h}$  点群と  $C_{2v}$  点群の相関表

$D_{\infty h}$	$C_{2v}$		
	$z \rightarrow z$	$z \rightarrow y$	$z \rightarrow x$
$\Sigma_g^+$	$A_1$	$A_1$	$A_1$
$\Sigma_u^+$	$A_1$	$B_2$	$B_1$
$\Sigma_g^-$	$A_2$	$B_1$	$B_2$
$\Sigma_u^-$	$A_2$	$A_2$	$A_2$
$\Pi_g$	$B_1 + B_2$	$A_2 + B_2$	$A_2 + B_1$
$\Pi_u$	$B_1 + B_2$	$A_1 + B_1$	$A_1 + B_2$
$\Delta_g$	$A_1 + A_2$	$A_1 + B_1$	$A_1 + B_2$
$\Delta_u$	$A_1 + A_2$	$A_2 + B_2$	$A_2 + B_1$
$\Phi_g$	$B_1 + B_2$	$A_2 + B_2$	$A_2 + B_1$
$\Phi_u$	$B_1 + B_2$	$A_1 + B_1$	$A_1 + B_2$
$\Gamma_g$	$A_1 + A_2$	$A_1 + B_1$	$A_1 + B_2$
$\Gamma_u$	$A_1 + A_2$	$A_2 + B_2$	$A_2 + B_1$

## 文献

1. 堀 健夫 訳「原子スペクトルと原子構造」丸善, 1973年(第2刷) (原著 : G. Herzberg, *Atomic Spectra and Atomic Structure*, Prentice-Hall, New York, 1937.)
2. 小谷正雄, 富田和久 訳「量子化学」山口書店, 1954年(第1刷), 1978年(復刻版 ; 生産技術センター) (原著 : H. Eyring, J. Walter, and G. Kimball, *Quantum Chemistry*, John and Wiley and Sons, New York, 1944.)
3. G. Herzberg, *Molecular Spectra and Molecular Structure I, Spectra of Diatomic Molecules*, Van Nostrand Reinhold, New York, 1950.
4. G. Herzberg, *Molecular Spectra and Molecular Structure II, Infrared and Raman Spectra*, Van Nostrand Reinhold, New York, 1945.
5. G. Herzberg, *Molecular Spectra and Molecular Structure III, Electronic Spectra and Electronic Structure of Polyatomic Molecules*, Van Nostrand Reinhold, New York, 1966.
6. 中崎昌雄「分子の対称と群論」東京化学同人, 1973年(初版第1刷)
7. 中原勝儼 訳「群論の化学への応用」丸善, 1980年 (原著 : F. A. Cotton, *Chemical Applications of Group Theory*, 2nd. ed., John and Wiley and Sons, New York, 1971.)
8. E. B. Wilson, Jr., J. C. Decius, and P. C. Cross, *Molecular Vibrations*, McGraw-Hill, New York, 1955.
9. S. G. Huang and P. G. Wang, *J. Chem. Edu.*, **67**, 34 (1990).

---

対称性低下法による電子状態の term 決定法

---

1982年 1月 22日	初版第1刷
1984年 2月 16日	第2版第1刷
2000年 2月 25日	第3版第1刷
2018年 11月 11日	第4版第10刷

---

著者 山崎 勝義  
発行 漁火書店

検印 

---

印刷 ブルーコピー  
製本 ホッチキス

---